

身延山久遠寺に関する研究2

一塔頭寺院群の形成について一

Keywords

身延山 久遠寺 宿坊
檀林 日蓮 文化財



AK15078 福原 侑

1. はじめに

1.1 研究目的

身延山久遠寺は日蓮宗の総本山であり、日蓮聖人が晩年9年間過ごした。また日蓮聖人の御廟所や宗門史上重要な建物が存在する。

2013年、2014年度の山梨県近代和風建築調査により、近世以前も含めた久遠寺の諸建築について再評価の動きが広まり、2018年度には19棟の建物が国の有形文化財に指定されている。身延山久遠寺の諸建築に対する研究は進んできているが、身延山久遠寺の塔頭寺院群の形成に関する研究はあまり進んでいない。塔頭とは本寺の中の子院を表す言葉である。

本研究では実測調査を行った大光坊・妙石坊・感井坊・松樹庵などを参考とし、身延山久遠寺の塔頭寺院の形成について明らかにする。さらに寺院群と講宿との比較をおこなう。

1.2 研究方法

(1)実測調査及び図面作成

調査地：身延山久遠寺

(大光坊、妙石坊、感井坊、松樹庵)

調査日：2018年8月6日～8日

(2)身延山久遠寺に関する史資料、文献などから塔頭寺院群の変遷を追う。

(3)(1)(2)より坊舎個々の成立過程による建築構成のグループ化を考察する。

2. 身延山久遠寺 について

身延山概要

久遠寺は山号を身延山と号し日蓮宗の総本山で、宗祖日蓮聖人（1222～1282）が開創した寺院である。西谷に三間四面の草庵を結んだのが始まりと伝えられている。日蓮は死去後、遺骨が身延山に運ばれ葬られ、日蓮宗最大の霊地となった。山梨県の西南部に位置し、南流する富士川の西方に位置する。支流の波木井川の川沿いを北上すると総門、三門を経て石段上に本堂・祖師道・御真骨堂等の主要伽藍が並び建つ。三門の西方を入ると「西谷」と称し御廟所など諸建物、東方の山裾には「東谷」の諸建築、背後の山中、山上に「奥の院」の諸建築で構成している。



写真1 身延山周辺地図

3. 身延山久遠寺の坊（子院）について

身延山は本院としての久遠寺と、子院としての三十二ヶ坊によって成り立っている。江戸時代の最盛期には塔中寺院は127ヶ坊(庵・寮・院)を数えた事もあったが、明治初年の廃仏毀釈の流れの中であって、各坊は統合を繰り返した。また、久遠寺は度重なる火災を経験している。なかでも明治8年(1875)に西谷本種坊から出火した火災が最大のもので本堂や祖師堂を含む144の堂宇が焼失した。このような流れで現在は三十二ヶ坊となっている。

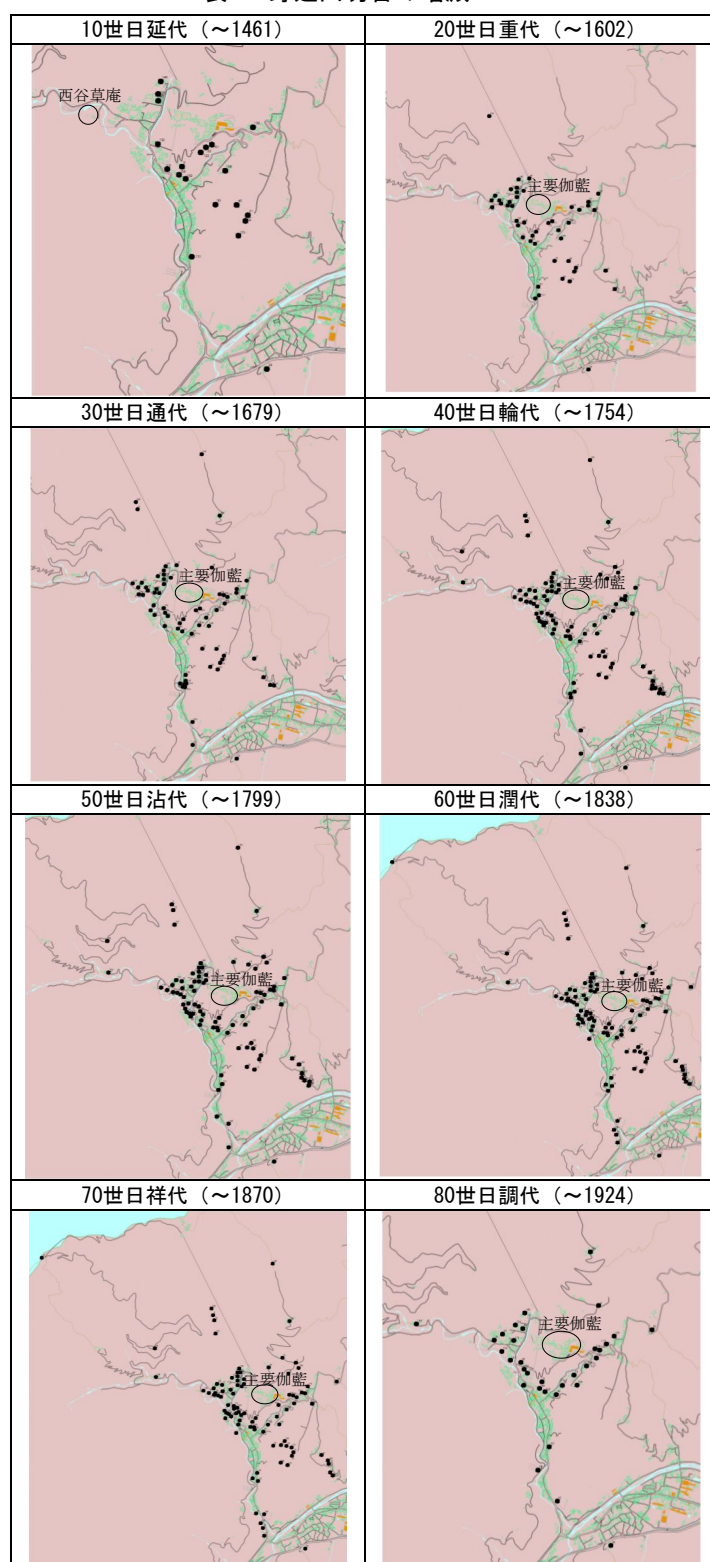
久遠寺は宿坊割によって諸国より参詣してくる信徒の奏者として宿坊を位置づけ、参詣の世話を任せている。これにより、本院は宿坊 - 参詣人のかたちで全国からの信徒を掌握した。近世中期以降全国各地から来る参詣者は宿坊割によって宿坊が決められ、各地域に住む参詣者は地域や門流ごとに把握された。

4. 坊舎群の発展と経緯

『身延山坊跡録』『身延山図経』絵図資料などの史資料などを参考に坊舎位置を特定し現在の地図にプロットし、変遷をたどっていく。

坊跡録には早川町にある9ヶ坊+3寺、敬慎院、奥ノ院が有るが本研究では対象の坊を身延町に限定する。坊跡録には年号がはっきりしているものも有るが、「祥師ムナ札あり」というように本院歴代の法主猊下の代の出来事であることしか特定できない場合があるので10世ごとの坊舎群の変遷を追う。

表1 身延山坊舎の増減



4.1 坊舎群の増減からの考察

10世日延代のこの時期は目立った偏りが少なく東谷、西谷、中谷、醍醐谷に坊が見られる。清水坊、松井坊、大乘坊など現在も位置も変えずに残る坊舎が7ヵ坊ある。20世日重代の時期に西谷坊舎の数が4ヵ坊から17ヵ坊と13ヵ坊増えていて西谷が発展して行ったことがわかる。

30世日通代には全体的に坊舎の数が増えこの時期から本院背後の山中の上ノ山の地域の開発が見受けられる。これは28世日眞上人の代に上ノ山の整備を行ったためである。40世日輪代には東谷は塩沢、西谷は妙石坊などの西谷田代とそれぞれ範囲を広げている。東谷、醍醐谷の坊数があまり変わっていないことから新しく建てるスペースを求めたためと考えることができる。50世日沾代には坊数の変化はほとんど見られない。60世日潤代にはまた全体的に坊数が増加し102ヵ坊と10世ごとに見たときに最大の坊数を数える。しかし最盛期の江戸時代に127ヵ坊を数えていることから60世日潤代は坊数が減少している期間である。70世日祥代も60世の代に続き減少をしている。80世日調代には93ヵ坊から33ヵ坊と・63ヵ坊と大きく数を減少させる。これは明治初年(1868)の廃仏毀釈や明治8年(1875)の大火などにより多くの坊舎が統廃合をしたためだと考えられる。身延山の坊舎群は東谷、西谷とあるように主に山々に囲まれた谷合の道に沿って発展や衰退をした。日蓮聖人が身延の地を開創してから江戸時代にかけて徐々に数や範囲を増やしていき明治の時期に大きく数を減らしていった。

5. 実測対象坊舎の概要

5.1 大光坊

日眞上人が身延山全山を大曼荼羅の様相に従って整備がされた。その時、祖師堂の裏手にあった三光堂の別当所、大光庵を現在地に移転され、その開祖となった。その後、明治3年(1870)、日祥上人により大光坊と改称された。日蓮上人自記作の大黒尊天が勧請されている。三光堂・大黒堂が敷地内に建つ。

表2 大光坊年表

寛文2年(1662)	大黒堂を引き移す
寛文5年(1665)	三光堂建立
寛文7年(1667)67歳	開基 妙心院日尊上人
宝永年間(1704～1711)	
寛保元年(1741)	
宝暦12年(1761)	三光天子宮殿 辰師ムナ礼
明和2年(～1765)	扁額(三光堂)
(～1773)	扁額(大黒堂)
寛政3年(1791)	庫裡再建立主 京都産
嘉永7年(1854)	今般大黒堂屋根替依薫功
安政4年(1857)	三光堂修復 大黒堂屋根替

5.2 妙石坊

日蓮上人が文禄年間(1593～1596)に開創。日蓮聖人が座られ、弟子たちに教えを説いたといわれる高座石がある。身延山久遠寺の守護善神である七面大明神が出現した場所として知られ七面山信仰において重要な場所である。また身延山図経に七面一華表を見ることができる。

表3 妙石坊年表

宝永元年(1704) 74 歳	開基 日蓮聖人 祖堂建立発起人
宝永 5 年(1709)	2 世 宗善坊日顯法師 祖堂建立預ノ主
	3 世 了達 祖堂建立預ノ主
	4 世 法蓮 妙石庵造立ノ主
寛保元年(1741)	
天明元年(1781)	妙石庵再建了有
天明 2 年(1782)	庫裡再建立主
文政 3 年(1820)	妙法社再建棟札有し
文政 5 年(1822)	祖堂再建浄勇代二企
天保年中	之順徳代二上葺成就ス棟札ハ祥師
天保 4 年(1833)	祖師堂再建企し
天保 14 年(1843)	祖堂再建
弘化 3 年(1846)	妙法社再建上棟
文久 2 年(1862)	坊号二改(妙石庵→妙石坊)
慶応 3 年(1867)	妙法社再建主仲師棟札
元治元年(1864)	祥師棟札 22 世要明院日嚴代建立有し
慶應 4 年(1868)	庫裡再建立

5.3 松樹庵

日蓮聖人が奥之院登詣の途中、松の木に袈裟を掛けたと伝えられる場所である。古写真が残り、奉納された建築彫刻と前進建築の様子がわかる。

表4 松樹庵年表

当山 9 ヲ年(1283)	宗祖袈裟掛ケヲ玉フ
年暦不詳	庵ヲ立ル 開基不知
宝永元年(1704)	祖堂再興
宝永年間(1704～1711)	
正徳 2 年(1712)	祖師堂建立
寛保元年(1741)	

5.4 感井坊

七面山道と奥之院道の分岐点(追分)にあり、日脱上人により元禄元年(1688)に開創された。日朗上人作の帝釈天を祀っている帝釈天堂があり、境内にある井戸は日蓮聖人が明神の夢をみた時に湧き出たと伝えられている。彫刻で荘厳された水盤舎の上屋で覆われていたが、水盤舎は老朽化により位置を変えている。

表5 感井坊年表

	開基不知
元禄 6 年(1688)	開創 棟札 1688 年発行
宝永 6 年(1709)	祖師像
宝永年間(1704～1711)	
享保 7 年(1722)	追分交接庵祖師堂造営成就
寛保元年(1741)	
寛延元年(1748)	井勺感井坊再建立
延享 5 年(1748)	妙泉庵再建時
宝暦 11 年(1760)	追分祖師堂再建立ノ願主
文化 4 年(1807)	祖師堂再建砌
文政 13 年(1830)	感井坊再建立

5.5 坊舎発生に関する考察

今回実測対象の坊は参詣道沿いに建てられた坊舎である。各坊のそれぞれに大光坊には大黒堂や三光堂、妙石坊には高座石、松樹庵には袈裟懸けの松、感井坊には霊泉のように信仰の対象となるものが存在するという共通点を持っている。

各坊の発生を見てみると大光坊は日蓮上人により大黒堂を上ノ山の地に引き移し開基し発生している。妙石坊は高座石の近くに日蓮聖人が祖堂の建立をはじめ開基した事から始まる。これらの坊舎は信仰の対象となるものがあり、それらに付随するようにして発生した坊舎であると考えられる。一方で松樹庵、感井坊は信仰の対象となるものがあるものの開基が不明な点や松樹庵の坊跡録による「庵ヲ立ル」という記載、感井坊の宝永年間(1704～1711)の絵図の様子や霊泉の水など休憩所として便宜上この地に建てられたものが坊舎として発展していったと考えることができる。これらのことから坊舎の発生には宗教の対象となる物がありそれらに付随するように発生する坊舎と休憩所として便宜上発生する坊舎の2種類のタイプ分類することができる。

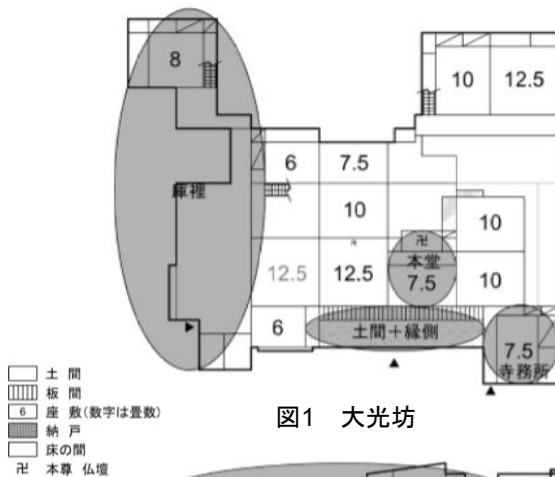


図1 大光坊

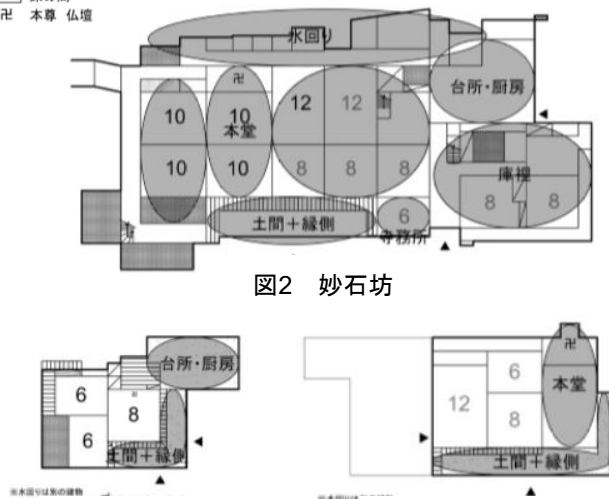


図2 妙石坊



図3 松樹庵

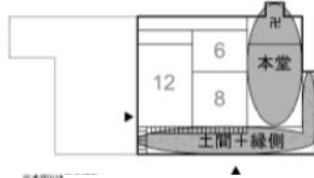


図4 感井坊

6. 赤沢村講宿との比較考察

6.1 赤沢村概要

赤沢村は山梨県南巨摩郡早川町にある集落で春木川東岸の傾斜のゆるい大地の上にある。東に身延山、春木川をはさんで西に七面山などの山々に囲まれ、身延山から七面山参拝へ向かう参詣ルートの中に位置している。

赤沢は古代にさかのぼると真言密教の霊場七面山を支援するために開かれたという由緒をもつ。

鎌倉以前に作られ、武田氏の山地開発政策によって定住が促進され、焼き畑工作を中心として展開された。霊場七面山や身延山との固有の関係を持ち、近世中期、江戸時代を中心として庶民の七面山信仰が盛んになるにつれて、赤沢も講宿の整備を整えていく。とくに遊山を兼ねた参詣が大流行する明治・大正期には宿場としての大改修が行われ、ほぼ現在の景観が形成される。

平成5年に国選定重要伝統的建物保存地区に指定される。

6.2 赤沢村の講宿との比較考察

赤沢村の講宿は梁間が石垣幅により制限される。身延山の坊舎群は地理的要因により松樹庵、感井坊のような山中にある坊は規模が小さく制限され、大光坊や妙石坊は周りが開けていて子院としての機能が残っていることもあり坊の規模も大きくなっている。赤沢の家屋の座敷まわりの縁は団体参詣客の相手をするため、縁全体が参

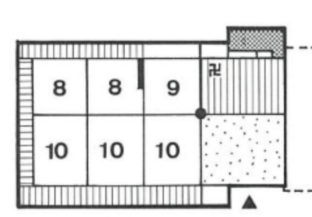


図5 大坂屋



図6 中野屋

詣客を迎え送り出す空間になっている。座敷まわりをL字、コの字型に巡らせており、赤沢村の縁の方が長くとられるようになっている。一方身延山の坊舎では縁の部分が通り土間となっていて参詣客の休憩所として利用されている。座敷の周りに縁を巡らす形でなく前の通りに合わせて一部分が縁となっており、身延山の坊舎の縁の方が短い。これは身延山には多くの宿坊があったが、赤沢村には講宿が少なく、一軒当たりの一日に訪れる参詣者の数が圧倒的に多かったために迎え入れの空間が大きくなったと考える事ができる。

赤沢村の講宿と身延山の坊の大きな違いは同じ敷地に堂宇が有ることや本堂として利用されていることである。本堂部分を見ると順番に土間、座敷、須弥壇という造りになっている。赤沢の講宿もこれに似た造りが見られ、土間、板の間、仏壇という造りになっていて、日蓮聖人の座像の入った厨子と先祖が奉られている。須弥壇と仏壇や座敷と板の間といった違いがあり身延山の坊舎群の方がより礼拝の空間を特別な空間としていることが分かる。これは身延の坊舎はそのものが宗教施設として発生したのに対して、赤沢村の講宿は農村が次第に整備されてきた宿泊施設であるという起源の違いにある。

7. 総括

本研究では、日蓮宗の総本山である身延山の全体の坊舎群の発展と経緯にふれ、七面山参詣道、思親閣参詣道沿いの坊舎に着目して坊舎の発生について考察した。少なくとも2種類の発生方法があることが分かった。身延山の坊舎群は支院として残る32ヵ坊と建物として残る坊舎がいくつかあり更なる研究の必要がある。身延山本院の久遠寺、奥ノ院思親閣、七面山敬慎院など日蓮宗にとって重要な場所であるが、身延山の坊舎も総本山である身延山の発展に影響を与えたことは間違い無い。今後その価値が再認識され、更に研究が進む事を期待したい。

参考文献

- 1) 『身延山信仰の形成と伝播』 望月真澄 岩田書院 2011
- 2) 『身延山久遠寺研究—伽藍の変容について—』 莊司柚太 芝浦工業大学論文2014
- 3) 『身延山坊跡録』 妙俊院日寿師 1885
- 4) 『身延山坊跡録 別冊』 身延山坊跡録編集委員会 編 1994
- 5) 『赤沢—山梨県早川町・伝統的造物群保存対策調査報告』 TEM 研究所 (株)博文社 1994
- 6) 『身延山史』『続身延山史』『身延山諸堂記』
- 7) 『身延山久遠寺史研究』 林是晋 平樂寺書店 1993